

第 35 回中央研修会(令和 7 年 1 月 26 日) 案内文

【コース別講座 Aコース】

<テーマ> ニューロダイバーシティの視点で考える子どもたちの「学びの多様性」

<講師> 村中直人氏(一般社団法人子ども・青少年育成支援協会代表理事)

ニューロダイバーシティは、1990 年代後半に生まれた言葉で「脳や神経由来の多様性が尊重される社会」を目指す、社会運動の文脈を持っています。

本研修では、そんなニューロダイバーシティについて、基本的な考え方や歴史などの基礎知識をお伝えします。またニューロダイバーシティの社会実装における重要テーマの一つとして、子どもたち一人一人の「学びの多様性」をとりあげます。

脳や神経の働き方に由来する「学びの多様性」や、そういったひとり一人の違いを尊重できる教育システムの姿についてともに考える時間としたいです。

これからの教育や学校のあり方に関心のある先生方に、ふるってご参加頂けると幸いです。

【コース別講座 Bコース】

<テーマ> 性的マイノリティの理解と支援

<講師> 葛西真記子氏(鳴門教育大学教授)

現在、社会全体として、性的マイノリティ、セクシュアル・マイノリティ、LGBTQ+、多様な性についての認識は増えており、文部科学省からも教員に対して適切な対応を求める通知が出されたり(文部科学省, 2012, 2015)、生徒指導提要(改訂版)において性的マイノリティの児童生徒への適切な支援の重要性について言及されたりしている(文部科学省, 2022)。さらに 2023 年には、LGBT 理解増進法案も施行され、学校において多様な性的指向・ジェンダーアイデンティティについての理解増進を求めている。このように教育現場において、性的マイノリティの児童生徒の現状を理解し、必要であれば適切な支援をすることが重要であることは認識されてきた。しかし、未だに「自分のクラス・学校にはいない」と思っている教職員も多いと思われる。実際は、多様な性を生きている児童生徒・教職員・保護者は存在しているのに、何も対応・支援していない学校もある。本研修会では、性的マイノリティについて基本的な概念から学び、実際の学校現場ではどのような支援が必要かについて、校種や様々なジェンダーやセクシュアリティごとに分けて説明を行う。適切な支援の方法を学び、多様な性を生きているすべての人々が安全で安心に過ごせる学校になることをめざしたい。

【コース別講座 Cコース】

<テーマ> 特異な才能のある児童生徒に対する理解と支援

<講師> 松村暢隆氏(関西大学名誉教授)

文部科学省の「特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」が昨年度から開始されました。「特異な才能のある児童生徒」と新しく言い表した子どもたちは、一般には「ギフテッド」と呼ば

れて話題に上ることが増えました。しかし「ギフテッド」や「ギフテッド教育」については無理解や誤解も多いため、才能や才能教育の概念を含めた十分な理解が、学校関係者には必要になります。「特異な才能」には、幅広い領域・特性や程度があります。それは IQ 等の特定の基準で一律に定義されるのではなく、個別の取組ごとに対象者の選定基準が決められます。才能のある子どもの指導・支援は、通常学級を拠点とした個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として、インクルーシブに実施されることが目指されます。発達障害や才能に起因する困難のある、2E や GDF と呼ばれる「困っている才能のある子」の存在の認識が高まることと、授業や教育相談・カウンセリングを通じた学習・社会情緒的支援、および学校外での支援の場との連携が、今後の課題になります。

【コース別講座 Dコース】

<テーマ> 外国にルーツを持つ子どもの理解と支援

<講師> 李原翔氏(神奈川県立地球市民かながわプラザ相談員)

2023年、日本の在留外国人は341万人を超え、過去最多となった。外国人の出身国・地域は195にのぼり、一番多いのは中国(788,495人)で、2位ベトナム、3位韓国、続いてフィリピン、ブラジル、ネパールである。そのうち、5歳~9歳の人数は97,471人、10歳~19歳は215,134人となり、2013年より約116万人増加している。

文部科学省の調査では、2023年に日本語指導が必要な外国籍児童生徒数は57,718人で、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒は11,405人だという。教育現場では、日本語を母語としない児童生徒への支援について、日本語指導教員の加配、日本語指導補助者・母語支援員の派遣、研修などの施策が講じられている。一方、子どもが直面している問題は、日本語をはじめ、異文化適応、進学進路、人間関係、アイデンティティの形成など多岐にわたる。発達障害の問題、学校生活への不適応や学習意欲の低下などに関しては、教育相談や心理面のサポートの働きが大いに期待されている。

【パネルディスカッション】

<テーマ> 「誰一人取り残さない」教育—インクルージョン型実践の可能性と課題—

<司会・指定討論> 和井田節子氏(NPO法人子ども支援地域プラットフォーム代表)

<話題提供①> 担任が行う多様な子どもたちへの支援

三谷幹氏(名古屋市小学校教諭)

<話題提供②> スペシャルオリンピックス日本での実践とスウェーデン小中学校における多様性への支援

高橋由衣氏(公益財団法人スペシャルオリンピックス日本職員)

<話題提供③> 病いによる傷つきを抱えた子どもたちの回復・成長に必要なかわり 副島賢和氏(昭和大学大学院保健医療学研究科准教授)

教室の中の多様な子どもたちをどう支えるか、というテーマについて教育相談の視点から考えます。

インクルージョンの考え方は浸透してきていますが、多様な子どもたち同士が同じ空間を共有するといっただけでは不十分です。子どもたち一人ひとりの能力が発揮され、安心感があり、子ども同士の相互作用の中で「誰一人取り残さない」教育が実現される教室をめざすためには、どのようにしていけばいいのでしょうか。

そのような問題意識から、本パネルディスカッションには、①多様な子どもたちを支えてきた小学校教諭の三谷幹先生、②スウェーデンの教育を経験し、障害の有無にかかわらず共に学ぶ体育授業を研究・実践している高橋由衣先生、③医療的ケアが必要な子どもたちへの支援を行ってきたホスピタルクラウンの副島先生、という 3 名のパネリストをお迎えしました。この多様な 3 人の語りが生み出す化学反応から、「誰一人取り残さない」教育のためにできることを考えていきたいと思えます。